

小学生用国語辞典はどのように作られているか

小 田 勝

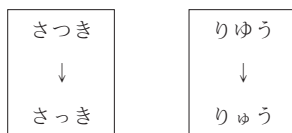
1. 本稿の目的

平成20年3月告示の「小学校学習指導要領」に、国語科の「第3学年及び第4学年」で、

表現したり理解したりするために必要な文字や語句について、辞書を利用して調べる方法を理解し、調べる習慣を付けること。〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕(1)イ(カ)

とあり、これを受けて、各社とも小学校3年生の国語教科書で、国語辞典の使い方を取り上げている⁽¹⁾。ところで、三省堂の教科書『小学生の国語 三年』の「国語じてんをつかおう」では、「言葉のならばじゅん」として、

○小さい「っ」「ゃ」「ゅ」「ょ」がつく言葉



のように、小字が後になることが示されているが(70頁、原文縦書き)、同社の一般向け国語辞典は、『三省堂現代国語辞典(第4版)』、『三省堂国語辞典(第6版)』、『新明解国語辞典(第7版)』、『大辞林(第3版)』とも、「さっき→さつき」、「りゅう→りゅう」という、教科書の記述と逆の配列順になっている⁽²⁾。これは義務教育との連関を考えたとき、望ましいことだろうか。国語辞典の編成が辞書によって全く区々という状況にあることは常識といってよいが、それでは、小学生用国語辞典の編成はどのような状況なのだろうか。各社区々であるのか、それともほとんど差がみられないのだろうか。現在、小学校3年で国語辞典の指導が行われているが、小学校教員は小学生用国語辞典の実態を、全体像として、把握しているだろうか。

本稿は、小学生用国語辞典の編成状況を調査し、もって国語辞典指導の参考に供しようとするものである⁽³⁾。

2. 見出し語の配列順

2.1 小字の配列順

小字（「っ」「ゃ」「ゅ」「ょ」）と大字の配列順は、調査に用いた小学生用国語辞典（以下「小学生用」）の全てで、「さつき→さっき」、「りゅう→りゅう」のように、「小字が後」になっている。一方、一般向け国語辞典（以下「一般用」）では、

小字が前＝講国・三現・三国・新解・集国・新選・小例・明鏡

小字が後＝岩国・旺国・学研・角必・新潮

のようになっていて、「小字が後」の方が少ない。小字を特別な文字と考えれば「小字が後」、小字を前の音節に付随したものと考えれば「小字が前」となるのだろうが、どちらにせよ、「一般用」と「小学生用」とで同じ方針を採るべきではないかと思う。⁽⁴⁾

2.2 同音語の並べかた

同音語の並べ方が国語辞典によって非常に区々であることは、広く知られている。「一般用」で、「升・鱒・増す・ます」（すべて和語で、名詞・動詞・助動詞）、「貝・權・甲斐・下位」（すべて漢字表記の名詞で、和語と漢語）の並べ方をみると、次のようであり、

(1) a 升→鱒→増す→ます（旺国・学研・講国・三現・新選・新潮・明鏡）

b 升→増す→鱒→ます（角必・三国）

c 升→鱒→ます→増す（小例）

d 増す→ます→升→鱒（岩国）

e ます→升→鱒→増す（集国）

f ます→増す→升→鱒（新解）

(2) a 貝→權→下位→甲斐（旺国・小例）

b 貝→權→甲斐→下位（新選・明鏡）

c 貝→甲斐→權→下位（講国・三現）

d 貝→下位→權→甲斐（角必）

e 甲斐→貝→權→下位（新潮・集国・新解）

f 權→貝→甲斐→下位（岩国）

g 下位→權→甲斐→貝（学研）

h 下位→甲斐→貝→權（三国）

その配列原理は、次のように、まことに多彩である。⁽⁵⁾

(3) a 品詞→語種→[文字数→画数]（新選・明鏡）

- b 品詞→語種→〔文字数→部首〕(岩国)
- c 品詞→語種→語構成(講国)
- d 品詞→語構成→語種→漢字の画数(三現)
- e 品詞→表記→〔文字数→画数〕(旺国)
- f 品詞→漢字部首順(学研)
- g 活用→表記→仮名表記語は品詞別、漢字表記語は〔文字数→画数〕(小例)
- h 語種→和語は品詞別、漢語は〔文字数→画数〕(集国)
- i 語種→語構成→品詞→漢字の画数(新潮)
- j 語構成→品詞→表記→語種→漢字の画数(新解)
- k 表記→漢字画数順(角必・三国)

「小学生用」でも、同音語の配列順は、辞書によって区々である。「ます」についてみると、次のようである。⁽⁶⁾

(4) a ます(鱒)→ます(助動)→升→増す(旺・学・べ)

b 升→増す→ます(鱒)→ます(助動)(文・三)

(4a)は「漢字で書かれる語を後に置く」もの、(4b)は「漢字で書かれる語を前に置く」ものである。「漢字表記語」内は、『旺・べ・三・文』は「文字数順→画数順」で配列するが、『学』は文字数を無視して画数順に配列する。したがって、「漢字表記語」について、両者の間で、

(5) a 雄→押す→推す(旺・べ・三・文)

b 押す→推す→雄(学)

(6) a 恵む→芽ぐむ(旺・べ・三・文)

b 芽ぐむ→恵む(学)

のような差が出る。同音語が多い場合、『学』の方式では、(7b)のように並ぶことになる。

(7) a 辰→竜→立つ→建つ→断つ(旺・べ・三・文)

b 立つ→辰→建つ→竜→断つ(学)

同様に、「トク」も『学』では「得→解く→溶く→徳→説く」の順に並ぶ(このような『学』の配列順は稿者には若干違和感がある)。

「小学生用」における同音語の配列順は、漢字で表記されるか否かが大きな基準となっているが、「漢字で書く語」の認定が辞書によって揺れるので、例えば『旺』と『べ』(「平仮名前→文字数→画数」配列)、『三』と『文』(「漢字前→文字数→画数」配列)が同じ原理で配列していても、

- (8) a たい (助動) →鯛→他意 (旺)
 b たい (鯛) →たい (助動) →他意 (べ)

- (9) a 鯛→他意→たい (助動) (三)
 b 他意→たい (鯛) →たい (助動) (文)

のような差が生じてしまう。『べ』と『文』では「鯛」を「漢字で書かない語」としたために、『旺』『三』と異なる配列順が生じるのである。ちなみに『学』は、(8b)と同じ、「平仮名前」方式で「鯛」を「漢字で書かない語」としているが、

- (8) c たい (助動) →たい (鯛) →他意 (学)

のように、助動詞を前に置くために(8b)と違いが生じている。「小学生用」ではどの辞書も品詞を配列順の第一基準とはしていないが、「平仮名で書かれる語」という同位の中でも、

- (10) a たち (名：性質) →たち (接尾) (旺・三・文・べ)
 b たち (接尾) →たち (名：性質) (学)

のような差が存する。

漢字で書かない語(平仮名で書く語)を前に出すという方針では、例えば「しょうしゃ(瀟洒)→商社」のように難しい語が前に並んでしまうという難点が考えられるが、「瀟洒」のような難しい語はそもそも「小学生用」に立項されないから、実際そのような問題が生じることはほとんどない。平仮名で書くことされる語は、機能語や「いか(烏賊)」のような日常親しい動植物名などがほとんどであるから、平仮名前方式(旺・学・べ)でも平仮名後方式(三・文)でも、優劣の差はつけられないように思う。

文字数が同じ漢字表記語の場合、辞書によって次のような差が存する。例えば、「解く・溶く・説く」について、「解」と「溶」は同じ13画の字で「説」は14画であるから、どの辞書も「説く」が最後位にくるが、「解」と「溶」は、これを部首別(『康熙字典』順)に配列すれば「溶(水部10画)→解(角部6画)」となる一方で、「解」は「教育漢字」であるが、「溶」は「教育漢字でない常用漢字」なので、教育漢字を用いる表記を先に出せば「解→溶」の順になることになる。調査結果は次の通りで、『学』と『文』は同画数の場合、教育漢字を先に出している⁽⁸⁾。

- (11) a 溶く→解く→説く (三・べ・旺)
 b 解く→溶く→説く (学・文)

2文字の漢字語「キコウ」のような場合、どの辞書も配列順は同じになる。どのような語が立項されているかも含め、下に示す(全辞書で「気孔」から右の順に配列される)。

	気	気	奇	紀	起	帰	帰	寄	貴	機
	孔	候	行	行	工	航	港	港	校	構
旺	○	○		○	○	○	○	○		○
学	○	○	○	○	○	○	○	○		○
三	○	○		○	○	○	○	○		○
べ	○	○		○	○	○	○		○	○
文	○	○	○	○	○		○	○		○

「小学生用」と「一般用」の同音語の配列法をみると、「一般用」の『角必』と『三
国』が「小学生用」の『三』『文』と同じ配列原理になっている。それ以外の「一般用」
で、「小学生用」と同じ配列原理のものはない。

3. どう立項するか

見出し語について、「一般用」では、「あさ-ひ【朝日】」のように「-」で名詞の語構
成を示す辞書（旺国・学研・新選・小例・新潮・明鏡）と示さない辞書（岩国・角必・
講国・三現・三国・新解・集国）とがあるが、「小学生用」で語構成を示した辞書はな
い。

揺れのある語形についてみると、例えば、「一般用」の、

(12) a こんがらかる（岩国・旺国・学研・角必・講国・集国・小例・新解・新選・
明鏡）

b こんがらがる（三現・三国・新潮）

のような状況に対し、「小学生用」では全て「こんがらかる」の形を見出し語としてい
る。「小学生用」は全て、「情緒」は「じょうちょ」、「固執」は「こしつ」、「出生」は
「しゅっしょう」、「発疹」は「はっしん」を本見出しとし、同質性・規範性が高い。
Greeceは、「一般用」では、

(13) a ギリシャ（旺国・学研・角必・三現・三国・新解・新選・大辞林・大辞泉）

b ギリシア（講国・集国・新潮・明鏡・広辞苑）

のようであるが、「小学生用」で全て「ギリシャ」としているのは当然である⁽⁹⁾。

立項に関しては、1見出し語内の多義とするか、別語（扱い）とするかという問題が
ある。「一般用」で、「つとめる」と「さめる」を調査すると、次のようである。

(14) a 「努める・務める・勤める」を1見出し（岩国・新解・小例・新潮）

b 「努める」「務める・勤める」の2見出し（旺詳・角必・集国・新選）

c 「努める」「務める」「勤める」の3見出し（旺国・学研・講国・三現・三国・

明鏡)

- (15) a 「冷める・覚める・醒める・褪める」を1見出し(岩国)
- b 「冷める・褪める」「覚める・醒める」の2見出し(旺詳・新解・小例)
- c 「冷める」「覚める・醒める」「褪める」の3見出し(旺国・学研・角必・講国・集国・新選・新潮・明鏡)
- d 「冷める」「覚める」「醒める」「褪める」の4語(三現・三国)

一般に、『岩国』は同語源の語を一見出しに、『三現』『三国』は漢字表記ごとに別見出しにする傾向にある。「小学生用」では、全ての辞書で、「つとめる」は「努める」「務める」「勤める」の3見出し、「さめる」は『小』が「覚める・醒める」を同一見出しとするほかは、「冷める」「覚める」「醒める」「褪める」を別見出しにしており、漢字表記ごとに別見出しにする傾向が強い。

なお、見出し語形では、「女王」を「じょおう」の形で見出し語に立てるが、『三』のように「じょうおう【女王】→じょおう」という空見出しを立てないと、小学生に(大学生にも)引けない可能性がある(「十干」「十進法」「十中八九」なども「じっ」で引くことに注意する必要がある)。

4. 漢字表記について

「小学生用」の見出し語の漢字表記については、2種類のものが存する。すなわち、常用漢字以外でも(表外字である印を付けた上で)漢字表記を示すもの(旺・三・小)と、常用漢字以外は平仮名で表示するもの(学・ベ)とである(『文』は中間タイプで、表外字は多く平仮名で示すが、一部漢字表記を示す語がある)。表外字の漢字表示をみると、次のよう⁽¹⁰⁾であって、『旺』と『小』が最も漢字表示率が高い。

	旺	小	三	文	学	ベ
ほうおう 鳳凰	鳳凰	鳳凰	鳳凰	鳳凰	ほうおう	ほうおう
あかし 証	証	証	証	あかし	あかし	あかし
あさ 漁	漁る	漁る	あさる	あさる	あさる	あさる

「一般用」にみられる、

(16) ではじめ=出始め(広辞苑)／出初め(大辞林)

- (17) a 偏頭痛(学研・角必・講国・小例・新潮)
- b 片頭痛・偏頭痛(三現・三国・集国・新選・大辞林)
- c 偏頭痛・片頭痛(岩国・旺国・新解・明鏡・広辞苑・大辞泉)

のような漢字表記の揺れ問題は、「小学生用」では起こりにくいですが、それでも、次のよ

うな揺れが存する。⁽¹¹⁾

- (18) a 相性・合い性 (旺・小・ベ)
- b 相性・合性 (学)
- b 相性 (三・文)
- (19) a 空揚げ (旺・小)
- b 唐揚げ (なし)
- c 空揚げ・唐揚げ (三・ベ)
- d 唐揚げ・空揚げ (学)

5. 語釈について

「小学生用」では、平易・簡潔な語釈がなされていて、辞書ごとのバリエーションはたいへん少ないといえる。例えば、「水泳」の語釈は、昭和18年刊の『明解國語辭典(初版)』では(20)、昭和47年刊の『新明解國語辭典(初版)』では(21)のようになっている、

(20) 水中をおよぐこと。およぎ。

(21) 〔人間が〕スポーツとして水中を泳ぐこと(術)。

(21)の「〔人間が〕」というのは「魚は水泳しない」ことへの、「スポーツとして」というのは「溺れた人間は岸まで水泳しない」ことへの配慮であるが、「小学生用」では、「泳ぐこと。」(三)、「およぐこと。およぎ。」(小)、「水の中で泳ぐこと。」(旺・文・ベ)のように各社簡潔な語釈をつけている。もちろん小学生用としては、これでよいのであるが、この中で、『学』の「スポーツや楽しみとして泳ぐこと。スイミング。」という語釈はユニークといえる。「はだし」を他書が「足に何もはいていないこと。」のようにする中で、『学』は「はき物をはかずに地面などをふむこと。」とするなど、⁽¹²⁾「小学生用」の中では、『学』の語釈はユニークなものが散見されるように思われる。(22b)(23b)のような『学』の語釈は、適否は別として、一般用の『新明解國語辭典』の語釈のような趣がある。⁽¹³⁾

(22) a 【血迷う】のぼせて、わけがわからなくなる。(三)

 b 【血迷う】〔はげしいかりなどのために〕こうふんして理性をなくし、正しい判断や行動ができなくなる。(学)

(23) a 【叫ぶ】①大きな声を上げる。(ベ)

 b 【叫ぶ】①〔はげしく高まった感情をこめて〕大声でいう。(学)

「穿く」の語釈は、「一般用」で、

(24) a (ズボンや袴などを)足から通して身につける。(旺国。『岩国』も)

b 腰から下の部分に、衣類をつける。(集国。『角必・講国・三国・新選』も)
の2タイプがあるが、⁽¹⁴⁾「小学生用」でも『学・小・文』は「足を通して身につける」型、「旺・三・ベ」は「下半身に(腰から下に)身につける」型の2タイプに分かれていて、「小学生用」でも語釈のバリエーションは存する。

「小学生用」で、語釈のブランチが歴史的配列というものはあり得ないが、「原義」と「高頻度の語義」とが異なる場合、例えば、

(25) a 【頭取】①人々の頭となる人。②(銀行などの)代表者。(旺)

b 【頭取】①銀行などで、代表となる人。②人々のかしらとなる人。(三)
のように、ブランチの配列順に差が出ることがある(『学・小・文・ベ』は「銀行などの代表者」の語義のみ)。

(26)は『旺』の語釈であるが、(26a)のような語釈を「言い換えの記述」、(26b)のような語釈を「説明的語釈」という(岩野靖則1982)。

(26) a 【いずれ】☐ [代名] どれ。どちら。☐ [副] ①どうせ。結局。②そのうち。近いうち。

b 【どれ】☐ [代名] はっきり決まっていない物事をさすことば。どのもの。
☐ [感動] 何かしようとするときに発することば。

「男」では、(27)のように、『旺・三・小・文』が「言い換えの記述」、『学・ベ』が「説明的語釈」となっている。

(27) a 男子。男性。(旺・三・小)

b 男性。男子。(文)

c 人間の性別の一つで、女でないほう。男子。男性。(学)

d 人間を性によって分けるとき、子どもを産むはたらきを持たないほう。男子。男性。(ベ)

語釈の工夫をみるために、各辞典の「賄略」の語釈を示す(下線は稿者が付けたもので、他書にない工夫と認められるところ)。

(28) a 仕事の上で、自分の得になるようにとりはからってもらうため、そのことに関係のある人にこっそりとわたすお金や品物。そでの下。(旺)

b [自分につごうのよいとりはからいをしてもらうなど] よくない目的で、人にお金や品物をおくこと。また、その品物。そでの下。(学)

c 自分だけ特別に有利にしておくと、こっそり力のある人にわたすおくり物やお金。(三)

- d 利益を得ようとして、関係のある人におくる金や品物。(小)
- e 自分に都合よくとりはからってもらうために、こっそりおくる、お金や品物。そでの下。(文)
- f 自分に都合よくとりはからってもらうため、相手にこっそりわたすお金や品物。(べ)

難しい語の語釈は、小学生用では一般用以上に工夫がいるところである。「ゲノム」で語釈の工夫をみよう(『三・文・べ』は立項していない)。

- (29) a 生物が親から引きついでもっているすべての遺伝情報。生物を形づくるさまざまなたんぱく質をどのように作るかの設計図。(旺)
- b 生き物が染色体の中にもっている、遺伝に関するひとまとまりの情報。(学)
- c 生物が生きていくうえで必要な、染色体のいちばん小さい一組。また、そこにふくまれる遺伝子。(小)

ここでは『旺』の語釈が分かりやすい。

「しゅれ」の項では、『旺』が「スキーがすき」、『三』が『「ねえ、おもちゃ買ってよ。」と言われて、『そんなこと思っちゃだめ。』と言うような」という例を出してほほえましい⁽¹⁵⁾。

真田信治(1987)によれば、土をすくったりほったりする道具である「シャベル」と「スコップ」について、東京ではシャベルが「片手に持つ小さいもの」、スコップが「足をかけることができるような大きいもの」を指す(人が多い)が、大阪では逆にシャベルが大きいもの、スコップが小さいものを指す(人が多い)という⁽¹⁶⁾。「一般用」をみると、『旺国』『学研』『集国』が大阪タイプ、『三国』と『三現』が東京タイプの記述をしている。『岩国』『講国』『小例』『新解』『明鏡』は、どちらもあるとした上で、基本を大阪タイプで記述していて、どとらかという「スコップ=小、シャベル=大」という大阪タイプの記述が多い(『角必』『新選』『新潮』は大小を記述しない)。一方、「小学生用」では、全辞書で大小の別を記述していない⁽¹⁸⁾。

付属語では、例えば「さえ」の語釈は、次の通りである(括弧内の【添加】【類推】【最低限】は稿者が付したもの)。

- (30) a ①さらに加わる意味を表すことば。そのうえ…まで。【添加】②普通とはちがったことを例に挙げて、ほかの場合のことを考えさせるときに使うことば。…でも。【類推】③(「さえ…ば」「さえ…たら」の形で)その一つのものがあればいいという意味を表すことば。…だけ。【最低限】(旺)
- b ①でも。すら。【類推】②(強めた言い方で)…だけ。【最低限】③そのう

えに。…まで。【添加】(学)

- c ①あることにつけ加わる意味を表す。その上。までも。【添加】②ある例を出して、そのほかの場合を考えさせる。すら。でも。【類推】③そのものが必要であることを強めて言う。だけ。【最低限】(三)
- d ①きょくたんな例をあげて、ほかをおしはからせることば。【類推】②その上につけくわえることを表すことば。までも。【類推】③ただ一つのことを取り出して、強めるときに使うことば。だけ。【最低限】(小)
- e ①あることの上に、またほかのことが付け加わることを表す。【添加】②軽いことを出して、それより上のことを想像させることば。だって。【類推】③一つのものごとだけをあげて、ほかのことは求めない気持ちを表す。だけでも。【最低限】(文)
- f ①つけ加えることを表す。…までも。【添加】②例を一つ挙げて、そのほかの場合を考えさせることば。…でも。…すら。【類推】③一つのことを強くいうときのことば。…だけ。【最低限】(ベ)

『学』だけが「言い換える的記述」になっている。(30)をみると、「添加」の意の記述は辞書間でほとんど変わらないが、「類推」の意は、「例を挙げて」(三・ベ)、「きょくたんな例をあげて」(小)、「軽いことを出して」(文)、「普通とはちがったことを例に挙げて」(旺)のように小異がある(とくに『小』と『文』の差は大きい)。「最低限」の意の記述は『旺』の「(「さえ…ば」「さえ…たら」の形で)その一つのものであればいいという意味を表すことば。…だけ。」が最も丁寧である。

和暦と西暦とで新年になる日にずれがあり、辞書によって西暦年の表示が食い違うことがある。例えば、福沢諭吉の生年、「天保5年」はその大部分が1834年であるが、彼は「天保5年12月12日」の生まれであり、「天保5年」は12月3日に翌1835年になるので、彼の誕生日「天保5年12月12日」は西暦では1835年1月10日になる。この場合、福沢諭吉の生年は、和暦と西暦のずれを正しく勘案すれば1835年生まれ、「天保5年」を「1834年」と機械的に置換すれば1834年生まれということになる(高島俊男2001)。彼の生年は、『大辞林』『広辞苑⁽⁹⁹⁾』が1834年、『大辞泉』が1835年としている。「小学生用」では、

(31) a 1834年とするもの=旺・学・文・ベ

b 1835年とするもの=三・小

となっていて、このような問題も、教室での使用時には、留意される。

6. おわりに

小学生用国語辞典は、一般用以上に規範性・同質性が高いと考えられるところであるが、以上にみるように、予想以上にバリエーションが存するのである。各社の工夫といえようが、(18)(19)のような表記の問題、(30)の類推の「さえ」の語積、(31)のような問題については、教室で複数の辞書を使用する際には留意しておく必要があるだろう。なお、類語の取り扱いや、アクセント⁽²⁰⁾、コラム、付録にも、各社力を入れる特色がみられるが、それらについては触れられなかった。

注

(1) 「国語じてんを引いてみよう」(学校図書『みんなと学ぶ小学校国語 三年上』68-71頁)、「国語辞典^{じてん}の引き方」(教育出版『ひろがる言葉 初学国語3上』46-49頁)、「国語じてんをつかおう」(三省堂『小学生の国語 三年』68-71頁)、「国語じてんの使い方を知ろう」(東京書籍『新しい国語 三上』22-24頁)、「国語辞典^{じてん}のつかい方」(光村図書『国語 三上 わかば』24-26頁)。

(2) 同社の『デイリーコンサイス国語辞典(第5版)』は小字が後である。

(3) 調査した国語辞典は、小学生用6点、一般向け13点。以下、国語辞書の引用は次の太字の略号で示す。

小学生用国語辞典：**旺**＝『旺文社小学国語新辞典』(旺文社1987年・第4版2010年)、**学**＝『新レインボー小学国語辞典』(学研教育出版2001年・第4版2011年)、**三**＝『例解小学国語辞典』(三省堂1999年・第5版2011年)、**小**＝『例解学習国語辞典』(小学館1965年・第9版2010年)、**文**＝『小学国語辞典』(文英堂1967年・第5版2011年)、**ベ**＝『チャレンジ小学国語辞典』(ベネッセ1985年・第5版2011年)

一般向け国語辞典：**岩国**＝『岩波国語辞典』(岩波書店1963年・第7版2009年)、**旺国**＝『旺文社国語辞典』(旺文社1960年・第10版2005年)、**学研**＝『学研現代新国語辞典』(学研教育出版1994年・第5版2012年)、**角必**＝『角川必携国語辞典』(角川書店1995年)、**講国**＝『講談社国語辞典』(講談社1966年・第3版2004年)、**三現**＝『三省堂現代新国語辞典』(三省堂1998年・第4版2011年)、**三国**＝『三省堂国語辞典』(三省堂1960年・第6版2008年)、**新解**＝『新明解国語辞典』(三省堂1972年・第7版2012年)、**集国**＝『集英社国語辞典』(集英社1993年・第3版2012年)、**新選**＝『新選国語辞典』(小学館1959年・第9版2011年)、**小例**＝『現代国語例解辞典』(小学館1985年・第4版2006年)、**新潮**＝『新潮現代国語辞典』(新潮社1985年・第2版2000年)、**明鏡**＝『明鏡国語辞典』(大修館書店2002年・第2版2011年)。

全ての「小学生用」の語釈が総ルビであるが、語釈はルビを削除して引用する。また引用にあたり、用例や注記などを適宜省略して示す。

『広辞苑』（岩波書店）は第6版（2008年）、『大辞林』（三省堂）は第3版（2006年）、『大辞泉』は第2版（2012年）を用いた。

(4) 中学生用から配列順に差が出て、『旺文社標準国語辞典（第7版）』、『学研現代標準国語辞典（改訂2版）』、『例解新国語辞典（第8版）』（三省堂）は「小字を後」とする一方、『ベネッセ新修国語辞典（第2版）』では「小字を前」にしている。

(5) 「表記」は「仮名表記語→漢字表記語」の順（『角必』と『三国』は仮名表記語が後）、「語種」は「和語→漢語」の順（『新解』は「外来語→字音語→和語」の順）、「語構成」は「単純語→複合語」の順の意。「漢字部首順」は1字目の漢字の『康熙字典』配列順の意。〔 〕内は漢字表記語の配列順。下位分類は一部稿者の推定を含む。

(6) 小学生用の場合、漢字で表記するか否かが配列順に大きな意味をもっているので、漢字表記を与えられていない見出し語は平仮名で書いて括弧に相当する漢字を示し、漢字表記を与えられている見出し語はその漢字で示した。すなわち、『旺』でいえば「ます〔名〕さけの仲間の魚。」とあるのを「ます（鱒）」と示し、「ます【升】〔名〕米・油・しょう油などの量を量る入れ物。」とあるのを「升」と示した。なお、『小』（5刷）は同音語の配列順の規則が（稿者には）見出せないので、本節では、『小』を除外している。例えば、『小』では、「ます」を、

升→鱒→ます（助動）→【増す】
のように配列する一方、「たい」は、

たい（助動）→【他意】→鯛

という順に配列している（【 】は学習漢字を使う書き方を示す）。稿者には、この配列順がどのような原理に基づくものであるのか理解できないので、本稿執筆にあたり、平成24年11月に小学館国語辞書編集部宛てに手紙で問い合わせたが、平成25年2月19日現在、返事をいただけていない。

(7) 『三』は「鱒」を漢字表記しているので、「升→増す→鱒」という配列順は不整である。

(8) なお、本稿執筆時に用いた辞書では、平成22年の新常用漢字表で追加された字について、配列順を正していないことによると思われる不整が散見される。例えば、『旺』（初刷）の「溶解→妖怪」「萎縮→畏縮」「急死→白歯」、『学』（初刷）の「牙→木場」「鹿→しか→市価→歯科」、『三』（初刷）の「溶解→妖怪」「養成→妖精」

- 「急死→[・]臼齒」、『文』（初刷）の「養成→[・]妖精」、『ベ』（3刷）の「溶解→[・]妖怪」「養成→[・]妖精」は順序が逆であろう（傍点の字が新しく常用漢字表に追加された字）。
- (9) 教科書に合わせているのである。なお『文』は、「霧雨→ギリシャ→キリシタン→切り捨てる」となっていて、「ギリシャ」がなぜか「ギリシア」の位置にある。
- (10) 「あばらや」は「荒家（旺）」「あばら家・あばら屋」（学・小）、「あばら家」（三・文・ベ）で、『旺』の漢字表記が最も一般用に近いようである。なお、『旺』は「あおむけ【^{〇〇}仰向け】」（「〇」は「教育漢字でない常用漢字」、「◇」は「常用漢字表にない読み方」を示す）、『小』は「あおむけ【あお向け】[▽]〔仰向け〕」（【[▽]】は学習漢字を使う書き方、[] は一般の漢字表記、ルビの数字はその漢字を学習する学年、「▽」は「学習漢字以外の常用漢字」を示す）のように表示していて、工夫が見える。『小』の「しそん【¹/₄子孫】」、「さるすべり【¹/₁₀₀百日紅】」のような漢字の学習学年表示は他書にはなく、ユニークである。
- (11) 『学』の「あきち【^〇空地・^〇明き地】」の「明き地」の表記など、小学生用としていかがであろう。
- (12) 『学』では「すあし」は「くつ下やたびなどをはかない足。はだし。」とあって、「すあし」は足袋や靴下をはいていないこと、「はだし」は履物をはいていないことという理解を示している。
- (13) ただし『学』にも問題のある語釈があるので、例えば『学』の「【品質】品物の性質。」などは、あまり適切な語釈とはいえないだろう（他社は「品物のよい悪い。品物の質。」（『旺』）のような語釈）。
- (14) 『学研・三現・明鏡』は「足を通して衣類などを下半身に身につける」（明鏡）のような混合型。
- (15) 「一般用」では、「へたなしゃれはやめなしゃれ」（岩国）、「潮干狩りに行ったがたいして収穫がなく、『云った甲斐（貝）がなかったよ』（新解）。旧版では、「バラエティーがおかしくてはら（腹）いてえ」（旺国・9版）、「越後屋のイチゴや」（学研3版）、「富田という男が何か失敗して、みんなが気まぜい思いをしている時に『とんだ事になったな』などと言って」（新解・4版）があった。
- (16) 小型のものは「シャベル」か「スコップ」か、として次のような調査結果をあげる（176頁。数字は％。大阪の数字が合計で100を超える理由は記載されていない）。

	東京	名古屋	大阪
シャベル	80.0	27.9	25.4
スコップ	18.8	72.1	98.6

イショクゴテ	1.3	0	1.4
イショクベラ	0	0	1.4

- (17) 「【スコップ】柄の短い、シャベルの小型のもの。」(旺国)、「【スコップ】(絵の短い) シャベル。」(学研)、「【スコップ】小形のシャベル」(集国) / 「【スコップ】土・砂・雪などをすくったりするのに使う道具。足をかけられるものが多い。」(三国)。
- (18) 中学生用では、『旺文社標準国語辞典 (第7版)』が大小の記述をせず、『学研現代標準国語辞典 (改訂2版)』と『例解新国語辞典 (第8版)』(三省堂)が大阪タイプの記述(「【スコップ】柄の短い、小型のシャベル」学研)をしている。なお、『ベネッセ新修国語辞典 (第2版)』には、
- 【スコップ】柄の短い、小型のシャベル。園芸などに使う。移植ごて。土をすくう取るのに使う柄の長いスプーン形の道具。シャベル。参考人により「スコップ」と「シャベル」はそれぞれ逆の形状のものをいうことがある。という丁寧な説明がある(ただし「小型のシャベル」という記述からは、「シャベル」が大きいものであるという大阪タイプの記述を基本としいることがうかがえる)。
- (19) 『広辞苑』は2版が1834年、3版が1835年、4版以降1834年と表示している。
- (20) 現在の小学生用国語辞典6点中、アクセント表示があるのは『小』だけである(ただし過去には、例えば『旺文社小学学習国語辞典』1977年などにもアクセント表示はみられた)。

参考文献

- 石山茂利夫 (1998) 『今様こくご辞書』読売新聞社
- 石山茂利夫 (2001) 『裏読み深読み国語辞書』草思社
- 岩野靖則 (1982) 「辞典の意味記述の文体」『講座日本語学文体系』明治書院
- 倉島節尚 (2002) 『辞書と日本語』光文社新書
- 真田信治 (1987) 『標準語の成立事情』PHP研究所
- 高島俊男 (2001) 『お言葉ですが…「週刊文春」の怪』文春文庫